

STATEMENTS 215
2019

行動するシンクタンク
一般財団法人 下関21世紀協会
Shimonoseki 21st Century Association

思索の人として行動し、行動の人として思索せよ
アンリ・ベルクソン (Henri Bergson) [1859 ~ 1941] フランスの哲学者

海峡花火の記憶

一般財団法人下関21世紀協会 会員 紺箭 修平

関門海峡花火大会、物心ついた頃から住んでいた下関の上田中から母に連れられて毎年必ず観に行っていました。もはや遠い記憶ですが、そのイメージは鮮烈に焼き付いています。当時は今と違う会場の形式で行われていた為か、大玉が降り落ちてくるかのような錯覚すら覚えた記憶があります。“原風景”という表現が正しいのかはわかりませんが、当時の匂い、空気などが濃色のコントラストで今も脳内に存在し続けています。沢山の観客の中に混じり、こんな大きな花火大会を自分の父がやっているという事は凄い事なのだ、と周囲に言われるまでもなく実感していました。

また、下関の地域ごとに開かれる様々な花火大会に連れられて行きました。そこで感動する多くのお客様の様子を見て育った私は、物心ついた頃から学校の課題等で将来の夢を問われれば『立派な花火屋になる』と、迷いなく答えていた記憶があります。

家業が火薬屋、花火屋という事の珍しさからか、幼いころから様々な方に興味を持って訊かれましたが、その度に得意げに花火のことを語っていました。しかし、思春期を迎え色々考えるようになった時、不意に何故花火屋に「なりたい」ではなく「なる」という感覚なのか？という疑問が浮かんでしまいました。自分が何故家業を継ぐのか？この立場に生まれたからにはそうするのが当たり前だからだと漠然と考えていた事にその時気付きました。当時色々やりたい事も見つかри、両親も好きな事をやっていいんだと言ってくれていたのですが、どうにも



海峡花火打ち上げ用の台船

どこかに引っかかるものがあり、何をしてもしないにも、どこか半端で自分を見失っていた時期がありました(今もしばしば自信を失い見失いがちですが…)

気付けばやはり現在、下関に戻り父の会社に勤め、火薬関係の事業を担いながら夏には地元で花火を上げさせていただいております。

腹を括り、家業を継ぐと決心してから逆にそのことの重みについて悩むようになってしまいました。腹を括ったつもりでしたが、実際に携わってみてその重みが仮想のものから現実のものに置き換わりました。その感触は今も背中に残っています。

私がまだ幼い頃に父を含む当時のメンバーが企画し、一から始めた関門海峡花火大会も、皆様の協力と沢山の方の御厚意により今年でもう 35 年目にもなります。その間、様々な問題を乗り越え、改善し、そのおかげで来場者数も増え続け、そして現在の形を経て今年は更に素晴らしい花火大会になるものだと思っております。

肩に重みを感じています。毎年毎年、一つ重なっていくものを継続し、さらに良くしていかなければならないという義務感、使命感が年々増してきています。

毎年、海峡花火当日は本部で台船の打ち揚げ現場とプログラムの指示、タイミング合わせ等を行っているのですが、会場の様子を生で見る事が出来るのですが、最後の一尺五寸の大玉が無事上がり、安堵と共に終了のナレーションの中、お客様に混じって現場へと歩いて戻るのがその時に見る光景は幼少の頃に見たあの“原風景”そのものだと思えます。

今年も、来年も、その先も、その為に。下関で花火屋の家に生まれた私の答えはそれだったと毎年確認できる私は大層な幸せ者ではないかと最近思うようになりました。



フィナーレを飾る一尺五寸玉の打上げ